

## 第2回生物多様性ながれやま戦略策定部会 議事要旨

日 時： 平成29年1月27日（金）10時～12時

場 所： 市役所第2庁舎306会議室

出席委員：

佐藤明部会長、新保國弘委員、岡田啓治委員、樫聡特別委員、  
高橋秀治特別委員、柳沢朝江特別委員

事務局（環境政策・放射能対策課）：

染谷環境部次長兼環境政策・放射能対策課長、遠藤環境政策係長、  
大竹主事

傍聴者：0名

議 題：

（1）生物多様性ながれやま戦略について

ア 市内ボランティア等の活動状況とモニタリング調査員の推移につ  
いて

イ 生物多様性ながれやま戦略（素案）について

（2）その他

資 料：

資料1：市内ボランティア等の活動状況

資料2：モニタリング調査員推移

資料3：（仮称）生物多様性ながれやま戦略中期段階（素案）

追加資料

平成28年度第5回環境審議会でのたご意見について

発言者	要旨
(議題ア)市内ボランティア等の活動状況とモニタリング調査員の推移について	
事務局	<p>前回の審議会では、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 市民の森で、地権者が代替わり等で重点拠点としての利用に反対があった場合の担保性について</li> <li>② 市民の生物多様性への理解不足</li> <li>③ 拠点に生物多様性との関連を掲示した看板設置</li> <li>④ 現状実施していない西初石小鳥の森の今後のモニタリングについて</li> <li>⑤ アライグマやアレチウリ以外の特定外来種対策について</li> <li>⑥ 西初石小鳥の森や市野谷水鳥の池の管理で、定期的に浚渫すべき</li> <li>⑦ 拠点ごとに学習目的や環境保護目的など、目的意識をもって維持管理すべき</li> </ul> <p>との意見があった。</p>
岡田委員	④について、年4回みどりの課の委託で生きもの調査をしている。
高橋委員	ホタルもこれまで10年間の記録もある。現在は少なくなっている。
新保委員	新拠点の予備調査にあたり、市の予算の都合上やっていないものである。
高橋委員	西初石小鳥の森は、土砂が入り水辺が少なくなっているため年々ホタルは減少している。ホタルのためには浚渫を行ってもらいたいところではあるが、委託内容が自然をそのままにするという場合は難しいのではないか。
岡田委員	みどりの課からの委託は、自然をそのままに、という内容である。
新保委員	<p>管理目標を拠点ごとに決めておかなければならない。指標種を拠点ごとに決めると、その指標種の増減に対応するために管理目標ができる。</p> <p>また、調整池は河川法の範囲内であるが、多様な自然を</p>

	作るべき。
佐藤部長	市野谷水鳥の池も近年浅くなってきていて、水鳥が減少している。多様な自然を持たせるべき。
新保委員	生物多様性は生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性がある。生態系の多様性は地形構造が多様であること、種の多様性は種の数の多さや希少種、外来種のこと、遺伝子の多様性は専門的すぎるので市ではできない。
柳沢委員	水辺から外来植物はやってくる。四半期に1度程度はモニタリングするべき。外来種対策は早めに対応するべき。
事務局	～市内ボランティアの活動状況とモニタリング調査員についての説明～
柳沢委員	人員推移からは読み取れないが、夏場の外作業は非常に厳しいものであり、高齢化と後継者育成は課題である。
新保委員	モニタリングの内容がこれでいいのかどうか、十分なのか評価すべき。また、魚類の調査ができる人を発掘して、どの種でやるか考えるべきである。
事務局	戦略内で、団体の活動紹介や後継者等の養成講座について記載する。
樫委員	キツネや野ウサギについても、住処が開発で分断されているため、調査すべき。
岡田委員	キツネは行動範囲が広く、野ウサギも各所でみられる。生態系ネットワークという概念が重要であるが、哺乳類は比較的考えやすいのではないか。少し長い目で見て、専門家に意見を聴き、調査マニュアルを作る必要がある。
新保委員	例えば、調査中に目撃した場合は記録するなどもよい。
佐藤部長	市野谷水鳥の池では、水生生物の調査しているのを見るが、どこが実施しているのか。
事務局	UR 都市機構が実施している。
岡田委員	管理はどこか。
事務局	下水道建設課である。
樫委員	UR 都市機構はミティゲーションの効果を調査しているのではないか。

(議題イ) 生物多様性ながれやま戦略(素案)について	
～事務局より生物多様性ながれやま戦略(素案)の説明～	
佐藤部長	事務局から生物多様性戦略の素案についての説明があったが、意見、質問はあるか。
樫委員	全体の構成は良いと思う。
岡田委員	50年間戦略との関係性はどのようなものか。
事務局	戦略のベースは50年間戦略にあり、その中期段階の部分を掲載したものである。
新保委員	次期総合計画にも反映すべき。
樫委員	各拠点に代表指標種を設けるとわかりやすい。
新保委員	指標種案は賛成する。モニタリング調査結果報告書も、各調査リーダーに任せているので共通性がなかった。次回の機会には日本自然保護協会(以下NACS-J)等に依頼し、分析や評価すれば活用もしやすい。データの収集目的を明示し、ただ生息数の増減を示すだけではないものを作るべき。
岡田委員	解析、考察には我々素人ではないもう一段上の物が必要。
佐藤部長	研究機関で行うような本格的なものを、経費をできるだけかけずに行うには難しい。指標種などを絞り、せめてこれだけでもやりたいというものを選別しないと厳しい。
新保委員	生物多様性ながれやま戦略市民会議ではやりきれない。また、素案の内容は保全がメインになっており、モニタリング結果の活用等具体的なことがない。
樫委員	新たに整備する調整池などは、生物多様性に配慮するように示すべき。
岡田委員	市民会議が機能していないので、運営方法等について見直すべき。
柳沢委員	調査員全員が生物多様性の意識をもっているわけではないので、勉強会をやるべき。
岡田委員	モニタリング報告書作成時は、データについての評価を我々がやったが、できれば有識者にお願いしたい。また、調査リーダーは更に分析等についても詳しくなるべきでは

	ないか。
樫委員	素案で示している戦略会議は、モニタリングだけを話す場となっている。
佐藤部会長	やはり専門家を招きたいところではあるが、生物多様性を手広く扱っている人はほとんどいない。
樫委員	個別の種の専門家を呼ぶのはどうか。
佐藤部会長	細かい話となるとより専門的な話になってしまう。
岡田委員	そこまで細かくなくとも、モニタリング結果を他の環境と比較する程度でもよいのではないか。
新保委員	わかりやすい見せ方、分析等については、市の方で検討してもらいたい。
事務局	職員だけでは専門家ではないので厳しい。
岡田委員	そこまで職員に求めるのは難しい。リーダーがやはり勉強せざるを得ない。
新保委員	リーダーへの研修が必要だ。
岡田委員	NACS-Jのデータのまとめ方を見よう見まねでやってみるのもよい。
新保委員	基本方針の重点プロジェクトは、直接的に生物に係るものを書くべきで、水質、植樹等間接的なものは大きく取り上げなくてよい。生物多様性関連イベントは利根運河地区でも実施したい。
柳沢委員	理窓会記念自然公園の竹の伐採について、市から東京理科大学へ要望しているか。
事務局	していない。
高橋委員	10年前東京理科大学からホタルの調査依頼があったので、そういう依頼があった場合は伐採依頼しやすい。
新保委員	利根運河協議会の会議の場では、市はもっと提案をするべき。
新保委員	基本方針Aの里山ボランティア講座は是非実現してもらいたい。
事務局	里山ボランティア講座は、どういうものであるべきか。

	県で実施しているものと同等の内容ではあまり意味がないと考える。
岡田委員	活動場所を見つけるのが難しい。活動場所がないと里山ボランティア講座で培ったスキルを存続して活躍させられない。
事務局	今ある市民団体の活動に将来的に結び付けられるのもよいと考える。
檜委員	地権者との交渉が課題ではあるが、やるべきところはある。また、講座は新しい団体ができるための手助けになればよいと考える。
新保委員	竹林管理は地権者が喜ぶケースが多い。あとは専ら、草刈が主になるのでは。
岡田委員	基本方針 B の大畔だけ具体的過ぎて違和感を覚える。また、市野谷の森には市有地の公園ができる旨も記載した方がよい。
新保委員	基本方針 A のモニタリング調査と活用の中に、評価及び対応についても掲載すべき。生物多様性ながれやま戦略の基本事項の戦略の位置づけにある、条約は発効年度に変更を、総合計画やほかの計画はいつまでのことと整合をとるのか、記載すべき。
佐藤部長	中期第一期戦略という表現をタイトル含め各所で初期段階と異なることがわかるよう統一して掲載すべき。
柳沢委員	リーダー以外の調査員のスキルアップ、知識量アップが必要。やってみたいという意思はあるものの調査に参加できていない人もいる。調査員増員講座も必要。
新保委員	資料編には外来種や種の保存法について掲載すべき。
佐藤委員	資料編の過去の植生状況について、「過去の」を具体的に書くべき。 他に意見がなければ、本日の策定部会は以上とする。
～次回の策定部会を2月28日10時からとした～	